

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520307

研究課題名（和文） 文学に見る「ローマ人」像の形成

研究課題名（英文） "The Romans" built up in literature

## 研究代表者

高橋 宏幸（TAKAHASHI HIROYUKI）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30188049

## 研究成果の概要（和文）：

ウェレイユス・パテルクルス『ローマ世界の歴史』（共訳）の刊行。カエサル『ガリア戦記』新訳作業の完了。作者不詳『アレクサンドリア戦記』と『アフリカ戦記』の試訳作業をほぼ終了。カエサル『ガリア戦記』からウェルギリウス『アエネーイス』への流れを示す両作品の共通要素を観察。『アエネーイス』をめぐって「永遠のローマ」の理念と関わる運命観、および、「葬礼」のモチーフについて検討し、新たな解釈を提起。

## 研究成果の概要（英文）：

Among the achievements are: a translation of Velleius Paterculus' *Roman History* published; a new translation of Caesar's *Gallic War* completed and forthcoming; tentative translation work of *the Alexandrian War* and *the African War* almost completed; common narrative patterns and themes pointed out between the *Gallic War* and Vergil's *Aeneid* in representing the leader at war; new interpretations proposed on the *Aeneid* focusing on *Fortuna* and funeral honor, the motifs involving "the Eternal City".

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：西洋古典学

## 1. 研究開始当初の背景

ラテン文学黄金時代の詩人たちが自身の

生き方を詩作表現の中心に据えていることはこれまでの研究においても指摘され、論

じられてきた。しかし、それらの議論は作家ごと、ジャンルごと、あるいは、文化的プロパガンダの観点から、個別に検討され、この時期の文学全体を総合的に見通したものはなっていない。

本研究の着想の第一はカエサル『ガリア戦記』を扱った拙著執筆過程で、次のような認識を得たことに発する。すなわち、第一に、共和政末期に高まったラテン語による本格的な歴史著作への期待にこの作品が十分応える内容を備えていたこと、第二に、そこに示される戦争観、運命観、理想的指導者像、統治の理念と現実認識といった点において、ウェルギリウス『アエネーイス』と多くの対応を有すること、である。つまり、『ガリア戦記』にはラテン文学が「ローマ人」を表現する画期的な一歩が認められるとともに、その歩みは共和政から元首政へという国家体制の大きな変革を越え、世界史の中でも稀有な天才政治家・軍人からローマ最高の詩人へと継承されていると見られる。

着想の第二は、そうして「ローマ人」像が形成されてくる過程が「永遠のローマ」の理念との関連を想定させることにもとづく。「永遠のローマ」とは、国家としてのローマの繁栄と存続は各時代が求める多様な才能の人間の輩出により、歴史の中で必ず訪れる危機を克服することで達成されるというローマ人の考え方であり、アウグストゥスのもとで内乱という国家存亡の危機が終息したとき、その理念の妥当性が現実を確認されたと見なすことができる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は共和政末期からアウグス

トゥス帝の治世にかけて現われてくる「ローマ人」像について、ラテン文学作品を中心とする関連文献を検討し、(1)その諸相を析出すること、(2)形成過程を観察すること、(3)支柱をなす理念を把握すること、そして、(4)各作家が「ローマ人」を提示する表現手法を明らかにすること、である。

前1世紀の大半を覆った長い内乱後に、ローマの作家たちはこのような愚行と混乱の原因がどこにあったか、同じ過ちを繰り返さないためにはどうすべきかを問い、その答えの模索の中でそれぞれの信じる生き方を表現しようとした。そうした営為から形成されてくる「ローマ人」像を本研究は考究の対象とする。

「ローマ人」像形成には、(1)カエサル『ガリア戦記』からウェルギリウス『アエネーイス』、つまり、世界史の中にも稀有な天才政治家・軍人による歴史著作からローマ最高の詩人による建国叙事詩へという方向性、および、(2)ローマ共和政末期の歴史意識の高まりの中で生まれてきた「永遠のローマ」の理念、つまり、国家としてのローマの繁栄と存続は各時代が求める多様な才能の人間の輩出により、歴史の中で必ず訪れる危機を克服することで達成されるという考え方、これら二つが重要な意味をもったという着眼に立って、ローマの歴史の中で繰り返し果たされた「危機の克服」とそれを成し遂げた歴史上の「多様な才能」がそれぞれにどのように表現されているか考察する。

## 3. 研究の方法

基礎的作業として、(1)関係研究文献の収集・整理、(2)CD-ROM およびインターネット上のデータベースサイトの検索によるテキスト分析と関係データの抽出・整理、および、(3)原典テキストの注解および邦訳を行なう。その一方、(4)関連テキストを「危機の克服」、

「多様な才能」という視点から検討・整理して、「ローマ人」像の諸側面を析出する。(5)(4)で得られた「ローマ人」像の個別的側面それぞれから対応点、共通要素を拾い上げると同時に、系統づけを行ない、総合的知見を得る。(6)この知見をまた個別のテキストにフィードバックし、それぞれの作家について「ローマ人」像の提起・表現の特色を観察する。

(3)に関して、本研究の重要な着眼を与えたカエサルの著作について、その全体的視野を得るため、真作の『ガリア戦記』『内乱記』の他に、真作か疑われるが、まだ邦訳のない『アレクサンドリア戦記』『アフリカ戦記』『スペイン戦記』の訳出に取り組む。

(4)(5)(6)に関しては、カエサル『ガリア戦記』とウェルギリウス『アエネーイス』は主たる考察対象としながら、キケローその他の関連テキストを参照する。

#### 4. 研究成果

基礎作業としての原典テキストの注解および邦訳の面では、まず、ウェレイユス・パテルクルスによるローマ概略史について初の邦後訳（[図書]の項参照）を刊行できた。この著作はローマ建都から作者の同時代、後30年までを2巻にまとめたものだが、その記述から作者の時代におけるローマの歴史に対する見方が窺え、アウグストゥス帝治下との意識の差が見て取れた。

また、カエサル『ガリア戦記』新訳作業を近く公刊できるところまで完了した。加えて、同『内乱記』後の出来事を記す未邦訳の作品、作者不詳『アレクサンドリア戦記』と『アフリカ戦記』の試訳作業についてほぼ終了できた。これらはもう一つの未邦訳作品『ヒスパニア戦記』とともにまとめて公刊を予定している。

テキストの検討という面では、まず、カエサル『ガリア戦記』からウェルギリウス『アエネーイス』へという大きな流れについて、両作品のテキストに即した比較によって確かに認められることを示した。『ガリア戦記』に現れる出来事の叙述パターンや表現要素が『アエネーイス』に取り入れられていると考えられる箇所が多く見出され、しかも、作品展開に重要な働きをなしていることを観察できた。なかでも、指導者の資質に関わる表現に類似性が見られたことは「ローマ人」像と直接関わる成果と考えられる（[学会発表]の項③）。

また、ウェルギリウス『アエネーイス』について「永遠のローマ」の理念とも深く関わる二つの論考を発表した。その一つは作品の運命観をめぐるものである。「運」ないし「運の女神」をめぐる表現が作品の主要登場人物三人それぞれの生き方を対比的に描き出すことにあずかっていることを観察し、それを通じて英雄的指導者にも人間としての限界が表現されていることを見た。この考察は研究集会での口頭発表（[学会発表]の項②）ののち、問題を作品の結末場面に集約させる形で論点をいっそう明確にして論文として公表した（[雑誌論文]の項①）。ちなみに、その検討過程でもカエサルの著作と共通する要素が気づかれ、さらに深めるべき課題として浮かび上がった。すなわち、運と武勇が互に関連させられながら、どのように成功への鍵として捉えられ、表現されているかという問題である。

『アエネーイス』に関するもう一つの論考は「葬礼」のモチーフについて検討した。それが作品の主題である「ローマ建国」、そして、「永遠のローマ」の理念とも関係しながら、詩全編に重要な意義を担っていることを観察したうえで、このモチーフは作品理解の

鍵である結末場面において曖昧な形で言及されるが、その曖昧性そのものが——主要人物の死による唐突な結末をもって表現される冷徹な死の絶対性との対比において——「ローマ建国」に苦難をもたらす未来の不確定性を暗示しているという解釈を提起した。この考察は研究集会での口頭発表（[学会発表]の項④）を経て、近く雑誌論文として発表される。なお、『アエネーイス』に関してはまた、英雄の美德ピエタースに「相対性」と「継承性」が認められること、この二つの性質が作品の主題『ローマ建国』に深く関わることを公開講演した（於慶應大学、H23. 10. 1）。

加えて、ローマ人の生き方を表現するためにギリシア神話の表象が利用されている場合に目を向けた。「死を越える愛」（[学会発表]の項①）はその一つの着眼である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①高橋宏幸、『アエネーイス』結末場面における「好機」、フィロロギカー—古典文献学のために、査読有、Vol. 6、2011、pp. 13-33.

〔学会発表〕（計4件）

①高橋宏幸、死を越える愛、比較神話学研究会シンポジウム「愛の二元性」（2010年9月4日、名古屋市市政資料館）

②高橋宏幸、ウェルギリウス『アエネーイス』における fortuna/Fortuna、古典文献学研究会第9回研究集会（2010年10月16日、京都大学）

③高橋宏幸、『ガリア戦記』と『アエネーイス』の共通モチーフ、京都大学西洋古典研究会（2011年12月18日、京都大学）

④高橋宏幸、『アエネーイス』における葬礼、

古典文献学研究会第11回研究集会（2012年10月27日、一橋大学）

〔図書〕（計1件）

①西田卓生・高橋宏幸、京都大学学術出版会、ウェレイユス・パテルククス ローマ世界の歴史、2012、249.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高橋 宏幸 (TAKAHASHI HIROYUKI)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30188049